

彩の歳時記

平成二十六年 九月

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

額田王【627〜】

「熟田津で船に乗ろうと月の出を待っていると、月ばかりか潮も満ちた。さあ、今こそ漕ぎ出しましょう。」



里中満智子 画

月の光が射し、潮が満ち、困難な航路へと旅立つ人々を鼓舞し勇気づける凛々しい歌。

「あかねさす」の歌と共に、万葉集を輝かせる星のような存在『額田王』の代表的名作。

初期万葉のシンボリック作品。熟田津は現在の四国・松山市道後温泉辺りの港。月は人類誕生以前から地球を周る衛星。古来、月の満ち欠けで時の経過を知り、多くの文学作品が生み出されました。月を愛でる慣習は薄れましたが「月見の会」などを通して触れ合っけてゆきたいものです。

九月の異称

長月

夜長月の略

玄月

「釣瓶落とし・秋の夜長」など 夜が長くなったことを感じる。

九月の暦

一日 防災の日 1928年に起きた関東大震災を教訓として1960年に制定。88年後に起きた東日本大震災

災は「天災は忘れた頃にやってくる」という物理学者で東大地震研究所員だった寺田寅彦【1878〜1935】の警句を思い起こさせた。寺田は漱石の弟子で『三四郎』の野々宮宗八のモデル。

二百十日 立春から二百十日目。夏目漱石の「二百十日」は、嵐で阿蘇山に登れなかった青年二人の会話が主体の小説で時事批評は秀逸。野分(台風)襲来の時期だが近年、早まっている。

哲学も 科学も寒き噓(くさめ)なり 寅日子句集

八日 白露

白露が野草に宿り秋の趣が深くなるというが。白露に風の吹きしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散りける 文屋朝康

鏡花忌

今も舞台で多く演じられる名戯曲を残した泉鏡花【1873〜1939】の忌日。



坂東玉三郎(人間国宝)は「外科室」「夢行燈」の映像化や『日本橋』『婦系図(おんなけいず)』

八日

『天守物語』『海神別荘』などで、鏡花作品において現代女形随一の存在感を魅せる。

七日〜九日 向島百花園・創設110周年 伝統行事 虫ききの会・月見の会

この期間、午後9時に閉園。お月見の祭壇、野点・お琴の演奏、おでんと茶飯や焼き鳥、生ビールも楽しめるといふ。



9月9日 菊の節句・重陽の節句

九日 重陽の節句(五節句の一) 奇数陽の数字の極・九が重なり重陽。菊は翁草・千代見草といわれ

邪気を払う長生きの草とされ、奈良時代、宮中では菊を酒に浸した菊酒を飲む宴が催された。

十五日 敬老の日 「第三月曜日」老人(高齢者)の施策対象は65歳以上。高齢者人口が%以上を高齡化

社会、14%以上を高齡社会、21%以上を超高齡社会と呼び、日本は

二十日 秋の彼岸(二十日から二十六日)の入り。

二十三日 秋分の日【二十四節気】彼岸の中日。昼夜の長さがほぼ同じに。

九月の歌

糸 詞・曲 歌 中島みゆき 1998年

元は天理教の現真柱・中山善司の結婚を祝して1992年に作られた楽曲。

1998年のテレビドラマ「聖者の行進」主題歌。2004年にBank Band【桜井和寿・小林武史】がカバー、2005年、住友生命のCM曲に。

以降、福山雅治・徳永英明・森山直太郎等、20人以上のアーティストがカバー。結婚式でよく歌われる。歌詞の「仕合わせ」とは「幸せ」ではなく「めぐり逢わせ」。縦糸と横糸が紡ぎ出す空間(人間模様)はどんな布なのか、思ひ巡らす詞が印象的な曲で、団塊の世代にも人気が高い。

なぜ めぐり逢うのかを
 私たちは なにも知らない
 いつ めぐり逢うのかを
 私たちは いつも知らない
 どこにいたの 生きてきたの
 遠い空の下 ふたつの物語
 縦の糸はあなた 横の糸は私
 織りなす布は いつか誰かを
 暖めうるかもしれない
 中略
 縦の糸はあなた 横の糸は私
 逢うべき糸に出逢えることを
 人は 仕合わせと呼びます